

## 子どもと保育の情景 (2)

# 「ばかって言わないで」

戸田 雅美

1

四月に、ある幼稚園を訪問した時のことである。私は五歳児の部屋にいた。

彼らが四歳児だった頃から何度かこの園を訪問していたので、この五歳児たちのことは、比較的よく知っている。四歳児の時はトラブルが多く、保育者もその対応に追われ、そのためか遊びがなかなか充実せず、子どもたちのの中に、いつも不満がたまっているように私には見えた。その子どもたちも、ほんの些細なことでもけんかになってしまうような個性の子どもが多いという印象だった。担任である若い保育者は、先輩保育者たちのアドバイスを受けながら一生懸命やっではいるものの、トラブ

ルに追われる、遊びが充実しない、だから不満がたまると、またトラブルになる、という悪循環をたちきれないまま四歳児を修了することになってしまった。

そのようなわけで、私は、担任もベテランの先生に代わって、五歳児になったこの子どもたちがどんな様子かと、気になりながら部屋に身を置いていた。

2

朝登園すると、さっそく遊び始める子どもたちの動きに応じて、担任は、「大型の積み木は友達に声をかけて二人で運ぼう」などと話しかけたり、子どもが始めようとしていることを察しては「エレベーターにするんだ。

すごいこと考えたね」などと認めたり忙しそうだった。

3

五歳児のクラスだと、こんなふう担任があれこれ言わなくとも子どもだけで安定して遊べることが多い。担任も「どうしても注意しなくてはならないことが多くて。だから、子どもたちが考えたりやろうとしていることもできるだけ認めるようにしたいと思うんです。でも、そうするとなんだか私ばかりしゃべっているようになってしまつて。本当は、担任がこんなにしゃべっているのは、おかしいと思つているのですけど……」とのこと。四歳児の時の彼らを知っているだけに、私にも、他によい方法が思いつかなかつた。そこで、「五歳児の今頃だから……といった外側から見た一般的な基準に合わせることも、今この子どもたちに一番よいと思うことをやるしかないのではないかしら。それに、子どもたちも、前の担任との違いに少し戸惑いながらも、以前よりは安定して自分の遊びに取り組んでいるように見える」というようなことを答えた。訪問者の私としては、こんな頼りないことぐらいいしか答えられない。

二時間近く遊んでそろそろ片づけになろうかという頃、たろうが担任のそばに行つて、「たけし君がぼくのこと、ばかつて言つた」と言う。たろうは、幼い感じの子どもで、四歳児の時は、何も言わずに一人でふらふらとしていることが多かつたので、こういう不満を担任に訴えるということだけでも、私には驚きだつた。

すると、担任は「たろう君は、ばかつて言われて嫌だつたんだ。だつたら、たけし君に『ばかつて言わないで』つてちゃんと言つたほうがいいよ」と言う。それを聞いて、私は少しはらはらした。というのも、たけしはこのクラスの中でも、些細なことでも怒ることが多く、ひどく相手をたたいてしまうこともあり、私も訪問者の立場に徹しきれずに止めることが何回かあつたからだつた。たろうもおそらく長いつき合ひの中でそのことはわかつているだろうから、担任がそう勧めても、はたして言いに行くだろうかとも思つて見ていた。

案の定、しばらくの間、たろうはふらふらとしてい

た。そうこうしている内に、担任は、他の子どもたちのトラブルのために、呼ばれてその場からいなくなってしまうっていた。もう言うことはないだろう思った頃、たままたけしが友達と一緒にそばを通りかかった。すると、たろうは「ばかって言わないで」と言う。その言葉があまりに唐突だったので、たけしは、一瞬何のことかというように立ち止まって、でもすぐに「ばかなんで、言っでない！」と答える。答え方の勢いが強かったので、私は、たけしには、思い当たることがあったのかも、私には、たけしは、思いながら、もし、たけしがたろうをぶつかりしたら、止めにはいるか、どうしようと迷いつつ、私の姿がたけしの視線に入るように少し移動した。けれども、たろうは、その勢いの強さをまったく感じないような様子で前と同じ調子で「ばかって言わないで」とまったく同じ言葉を繰り返す。たけしも負けずに「ばかなんで、言っでないで言っでないで」と言い返す。

それでもまた、「ばかって言わないで」と同じ調子で言うたろうに対し、今度は、たけしは、周りにいた子ども



もたちに「ばかなんで、言っでないよなあ」と同意を求めると、しようたがささず、「そうだよなあ」と同意する。ところが、ゆうととまさきは、わからないというように、緊張した表情で黙って様子を見ている。

そこで、たけしは再びもつと勢いよく「いつ言っただよ。ばかなんで、言っでないよなあ。なあ！」と同意を求めると、しようたは、さつきは同意したしようにたも、やっぱりわからないというように、黙ってしまった。

たろうは、その沈黙を見るとふつと緊張が解けたように表情を和らげ、「もう、ばかって言わないでね」と言

う。すると、騒ぎに気がついて集まってきた子どもたちも、しょうた、ゆうと、まさきも、たろうに同調したようにふつと緊張が解け、表情が和らいだ。

たけしは、周りの子どもたちの様子の変化に戸惑って、一瞬動きがとれずにいる。その時、「もうお片づけだよ」と、このトラブルを知らないさやかが通りかかった。子どもたちは、ほっとしたように、もう片づけだど動き始める。たけしも、「片づけだどてさ」と、他の子どもの動きに合わせてるように移動した。とうとう最後まで「ばかって言ったことがあった」とも「もう、ばかって言わない」とも言わないままではあったが、一方のたろうはすっかり満足しているようだった。

その時、担任は、たろうのそばに来て「たけし君もうばかって言わないって？」と聞いた。たろうは、どちらとも答えず、にこにこ担任に顔を向けていた。どうやら、他に呼ばれていたはずの担任は、どの時点からは定かではないが、途中からこの成り行きを見守っていたらしいと、その時初めて私は気がついた。

#### 4

ずっと「ばかって言わないで」としか繰り返せていなかったたろうが、なぜ他の子どもの沈黙の意味を的確に読み取って、表情を和らげることができたのか。なぜ、ゆうととまさきは、たけしの言葉に簡単に同意しなかったのか。なぜ、同意しない二人を、たろうは怒らなかつたのか。四歳児の時には、起こりえなかつた姿がそこにはあった。子どもたち一人ひとりが、自分で、状況を感じ取って、踏みとどまって考えようとする姿のように、私には見えた。そして、この変化は四月からの担任の保育のひとつの結果なのだろうと改めて思う。

さらに、保育の目的についても、「社会性の発達」「思いやり」「善悪の判断」「コミュニケーション能力」といった言葉でくくってしまえば、いかにもわかつたことのように語られてしまうが、実は、こうした小さな変化の中にこそ、その確かな育ちの方向性が潜んでいるのではないかと考えさせられた。

(東京家政大学)